



本居宣長周辺のことば遊び

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 北海道教育大学国語国文学会・札幌 公開日: 2013-01-11 キーワード: 作成者: 吉見, 孝夫 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00007399

本居宣長周辺のことば遊び

本居宣長はことば遊びに並々ならぬ関心を抱き、種々のことば遊びを実作している。自ら楽しむだけでなく、門人たちや周囲の人々をも遊びに巻き込んでいる。例えば筑摩書房版全集別巻二の「雑録」中にある「なぞなぞ一」がそうである。ここでは宣長は門人たちとなぞなぞを作り合っている。

筆者はこれまで宣長とことば遊びの結びつきにつき、いくつかの論考を発表してきたが、この小論では、宣長周辺の人々が、ことば遊びを楽しむ様子を拾ってみたい。宣長と弟子たちとのかわりを見ることを目的とするので、調査は筑摩書房版『本居宣長全集』の範囲にとどめる。全集からの引用に当たっては、「一八一三—三八八」のように、漢数字で巻次を、算用数字でその所在ページを示す。

ここでは具体的に例示することに重きを置き、必要最小限の注解を付けるにとどめる。その意義づけにも言及はしない。以下

一

下年代の順に従う。

二

安永元年（一七七二）三月から四月にかけて四三歳の宣長は大和へ旅行した。随行した当時一七歳の門人稲掛大平が、その折の見聞を『餌袋日記』と称した紀行文に書き綴っている。因みに宣長自身は同じ旅行を『菅笠日記』に記している。以下はその三月一二日のエピソードである。

解良 ならのかたへはこ、より当麻、立田をへて行といへど、このたびはえものせで、三輪にまうでてかへらむとてゆくに、耳無山左のかたにいとちかし、みどりのいろふかく木のめも春のけしきは、へ青す（げ）山【万一藤原御井の長歌 み、なしのあをす（け）山は】とほめけむもげにさる事なりかし

鶯のつくるもきかぬみ、なしの山よ春とはいがてしりけむ、

吉 見 孝 夫

〔餌袋日記〕別三―一―

三輪即ち大神神社参拝の折に、耳成山の景色を見て大平が作った和歌である。「万一藤原御井の長歌」とは次の『万葉集』五二番歌。

……耳梨の青苔山は背面の大き御門によろしなへ神さび立てり……〔万葉集〕卷一 五二番_注）

「耳無し」の山なのだから、鶯が春を告げるのも聞こえないはずなのに、どうして春が来たと知ったのか」という、耳成山を「耳無し」に読み成した戯れ歌。

耳成山を「耳無し」と読み成すのは『古今和歌集』にもあることで独創ではない。

耳なしの山のくちなしえてしがな思ひの色の下染めにせむ

〔古今和歌集〕卷一九 一〇二六番_注）

十代の大平にしてみれば、和歌修行中の習作なのであろう。

三

宣長は、寛政五年（一七九三）に、長子春庭、大平らを伴って上京している。宣長六四歳、春庭三一歳、大平三八歳の時である。在京中の四月七日嵯峨方面に門人らと遊んだ。その折りに次のようなエピソードがあった。なお、春庭は同行していない。

川へなる茶屋にて物くひけるに鮎を出しければあるき物語

などに西川のあゆとある事を思ひいてて 大平

花もなきころしも尋ねきにしかは山にそはつるあせあゆる迄 宣長

かへし 眞風

年ことにはかはあれ共夏山をあゆひかためて猶そわけ見る

西川のあゆとしきは何となく昔おほえてなつかしきかな 高門

我うしと手たつさはりて大ぬ河川へにあそふ此日たぬしも

さくら花散にし川に立出てこのもかものにあゆつるやたれ

〔結びすてたる枕の草葉〕一八―三八

〔結びすてたる枕の草葉〕とは、全集の「解題」を引用すれば、次のような旅行記である。

宣長は、寛政二年（一七九〇）十一月、春庭・大平のほか門弟数人を同伴して上京し、光格天皇の御遷幸を拝観した頃から、古学を京都に広めたいという宿志を抱いていたが、おのずからその機が熟し、寛政五年（一七九三）六十四歳、

上京の実現を見た。三月十日に例の如く春庭を伴なって松坂を立ち、稲掛大平・大館高門の二人も後から一行に加わった。旅程はすべて四十日にわたり、京都にとどまること約一月、その間、播磨の眼科医に春庭の眼病の治療を乞うため、大阪にも赴いている。帰途は近江・美濃・尾張等を廻って門人の家に宿し、四月二十九日に帰着した。この

旅行の、歌を中心に纏められた紀行が、『結びすてたる枕

の草葉』である。

〔解題〕一八一—四四

紀行文というよりも歌集に近い。

京都西川の川辺の茶屋で休んだ時に膳に鮎料理が出てきた。

そこで各自が和歌を詠んで時を過ごしたという場面である。

「西川」は京の西部を流れる桂川（大堰川）のこと。貞享三年（一六八六）の『雍州府志』にも次のようにあり、美味の鮎を産するところで名高かった。

鴨川并嵯峨大井川之産為美味

（『雍州府志』巻六「土産門 諸魚部 鱒魚」（三））

「鱒魚」とは鮎のことである。

「ふるき物語などに西川のあゆとある事」とあるのは、『源氏物語』の次の例などを思い浮かべたのであろう。

親しき殿上人あまたさぶらひて、西川よりたてまつれる鮎、
近き川のいしぶしやうのもの、おまゑにて調じてまいらす。

（『源氏物語』「常夏」（註））

「真風」は沢真風、生歿年不明。寛政七年以前に鈴屋門に入る。当時京の中長者町に在住し、宣長一行はこの在京中は真風宅に滞在している。また、この二年後の寛政七年に、春庭が眼疾を治療するために上京した折にも真風が世話をしている。

「高門」は大館高門。尾張の人で天明四年（一七八四）に宣長に入門している。寛政五年時は二八歳。宣長は名古屋を訪れる度に大館家に宿泊している。この一、二年前の寛政三、四年に春庭が眼病治療のため尾張の眼科医院に入院した際には高門の世話を受けている。

真風、高門ともに宣長とは単なる師弟関係を越えた結びつきをもつ者である。

大平の短歌は第三句「きにしかは（来にししかば）」に「西川」を、第五句「あせあゆる迄（汗零ゆるまで）」に「鮎」を詠み込んだ物名歌になっている。宣長の返歌も第一、二句「年ごとにしかはあれ共（年ごとに然はあれども）」に「西川」を、第四句「あゆひかためて（歩びかためて）」に「鮎」を詠み込んだ物名歌である。

真風の短歌、高門の第一首にはことは遊びの要素はない。高門の第二首には「散にし川」に一応「西川」が詠み込まれているが、「川」を「川」と詠むのでは物名歌としては落第であろう。

大平、宣長が物名歌で応酬しているのに対し、真風や若い高門に遊びの要素が余り見られないのは、師を前にして大平ほどにはくつろげない故か。

四

次も前項と同じく『結びすてたる枕の草葉』にあるので、寛政五年の上京時のこと。掲載位置から推して四月八日過ぎと思われる。京在住の小沢蘆庵を大平、高門が尋ねた折りに「花橘」という茶を贈られた時の歌。

小沢蘆庵翁のもとに高門とともにとふらひ物しけるをり花
橘と名つけたる茶をおくれるにそへたる

名にしおはこれをおよすかに時鳥君か屋とはなたちはなれそよ

かへし

蘆庵

ほと、きすとひもとはずもことの葉の花たちはなになまつそめて
つる

〔結びすてたる枕の草葉〕一八一—389)

大平の歌は、下の句「君か屋とはなたちはなれそよ（君が屋
訪はな立ち離れそよ）」に「花橋」を詠み込んだ物名歌。

ちなみに蘆庵は前年の寛政四年に宣長の『玉あられ』を批判
した『玉叢難詞』を刊行しているが、この寛政五年の宣長上京
で親交を結んだと言われている。

五

これはこの旅の帰途でのこと。寛政五年四月二十七日、間もな
く松坂に着こうというところ。

此日白子の阿弥陀寺といふ寺にやとる

鈴屋老翁此やよひ霞と共に旅衣立出給ひしを柳桜こきま
せたる都の錦にかへてかへりき給ふこ、かしこに日数へ
つ、めくり給へる国々の名の一もしをとりて句の上につ
らねここに待つけまゐらせたるよろこひをのへて奉る

村田橋彦千七百四

いつしかとあふきまちけるやとなれはみち芝分てをちか来ませ
るいづつかとあふきまちけるやとなれはみち芝分てをちか来ませる

〔結びすてたる枕の草葉〕一八一—396)

「白子（しろこ）」は現在の三重県鈴鹿市白子地区。村田橋
彦は白子に隣接する江島の回船業者。天明三年（一七八三）頃
宣長に入門したと言われる。宣長より年長で、この時六七歳。
村田橋彦の歌は、宣長がこの度の旅行で通過した国々、伊賀（あ
るいは伊勢か）、近江、山城、美濃、尾張の頭文字を句頭に置
いて宣長の帰着を歓迎する意を詠む。

六

宣長は紀伊藩主徳川治宝の召しによって、寛政六年（一七九
四）一〇月一〇日に大平を伴い和歌山に赴いた。その折りの大
平の紀行文『なぐさの浜づと』に次の大平の和歌がある。一一
月頃のエピソード。なお、「なぐさの浜」は紀伊国の歌枕。

又定家の卿の梶井宮に奉れたまひける詠歌大概を本文に
て、歌の道のこと、もこまやかにとき申給ひける日もあ
りけり、又板文庫とていとめつらしき物をなん給はりけ
る、さるは此翁にとらすへきは何よけんとかしこくもお
もほしめくらしめて、かくいとみやひかなる物は給ひける
とぞ、見待れば、吹上の浜に菊の花たてる絵いみしうえ
もいはすかきなしたり、硯筆などそへられたる、筆はわ
かの浦の蘆をつかにしたる、水かめは同じ浦の錦貝をあ
はせて、藤代の湯浅のなきの葉形の雲 田辺のとちをつ
かにしたる小刀きりなともあり、色紙のいとめてたきを
はさみてゆひたる紐なん、物よりことにめてたかりける、

白きと紅と半そめわけたる色あひなど、けに深く御心いれさせたまへるかたしけなさも見えて、目もあやなる物のさまなり、かゝる物は、やんことなきわたりにごそさるへきをりなとまゐらせ給ふこともあれ、いみしうおもしろいへと、殿人のかきりは賜るためしもなかんめりなと、見おとろきつゝ、かたらふ人々おほかり、此物の名をこめて

年高きおいたふ身こそかしこけれめくみも深き御代にあひつゝ、
〔なぐさの浜づと〕別三—61・62〕

見事にしつらえられた板文庫を、硯や筆などの文房具とともに治宝から宣長が賜った。それをめでての太平の作歌である。「おいたふ身こそ(老い給ふ身こそ)」に「いたふみこ(板文庫)」が詠み込まれている物名歌。「老い給ふ」とあるように、この時宣長は六五歳。

七

同じく『なぐさの浜づと』に次の歌がある。

いかなる時にか有けん、物名のうたよみ給へるを見て同
しうよめる 小忌 心葉 日影

咲梅を見るこは今こころはよし月なき夜は思ひかけすよ
〔なぐさの浜づと〕別三—63〕

師宣長が「小忌・心葉・日影」で物名歌を詠んだので、大平も同じ題で詠んでみたというのである。この宣長の歌は、同じく和歌山への旅中を宣長自身が記した『紀見のめぐみ』で知ることができぬ。

ものの名 小忌 日蔭 心葉

田を見すやはやかりはこひかけほしていそけ里の子ころは過に
き
〔紀見のめぐみ〕一八—411〕

「小忌」は大嘗会や新嘗会に小忌の衣を着て神事に奉仕すること。「心葉」はその時に頭に付ける造花。「日蔭(日影)」は同じ時に冠に掛けて垂らす糸を組んで作った飾り。

新嘗会は一月二番目の卯の日に執り行くとされる。寛政六年は一月十九日がこれに当たる。宣長の歌は霜月二十七日と閏霜月三日の記事の間にある。数日前にあつた新嘗会を思い起こしてこの物名歌を詠んだのであろう。そうだとすると、物名歌の内容からして新嘗会に因んでいるのであるから、制作時期を失念したとしても容易に思い出せるはずなのに「いかなる時にか有けん」という大平の記述が解せない。

八

寛政九年(一七九七)三月二〇日、宣長は大平や岡山正興ら松坂や津に住む門人たちを伴って伊勢国壹市郡辛洲の浦で花見をした。その折に人々が詠んだ歌を正興が記したのが「香良洲

の花見』である。岡山正興は松坂日野町に住む門人。安永八年（一七七九）入門。寛政九年時は三七歳である。

序文によると「松陰にむしろかもなと打しきて、人々円居してさけのみわりこなど物しつ、おのかし、うたよむほとに、此御社の神主今井ぬしもおなし友なれば、出来て行くれとねもころにあるしせらる」（別三―69）といった様子で宴が開かれている。「今井ぬし」は香良洲神社神主の今井一清。生歿年未詳。彼も寛政二年に入門している。

この折にことば遊びに類する和歌がいくつも見られる。

森の間にさくらの花のいさ、か見えければ

浦の名のからすにはあらてさくら花松のこのまに驚かとそ見る
(略)

たはふれ

名にしおはは神の御垣のさくら花ちるへからすとなどかいさめ
ぬ

大ひら

手をりゆく人なければや神垣は枝高からす花のさくらむ

〔香良洲の花見〕別三―70)

「浦の名の」「名にしおはは」の詠み手は宣長。「浦の名の」歌は、言うまでもなく「からす」に地名と鳥の意を込めている。

白く咲く桜を「驚」に見立てて、鳥と対比させた妙がこの歌の眼目であろう。「名にしおはは」歌は「ちるへからす（散るべ

からす）」に地名「からす」を詠み込んでいる。大平の歌は「枝高からす（枝高からす）」に「からす」を詠み込んだ物名歌。

九

享和元年（一八〇二）五月、六月に宣長は上京し、堂上歌人と講義や和歌の贈答で交わりを結んだ。その折の人々の和歌や文章を、安田広治が『京みやげ』と題して書き残している。

安田は伊勢山田の御師。天明八年（一七八八）に入門し、寛政七年（一七九五）には宣長の三女能登と結婚している。享和元年当時は三四歳。

その『京みやげ』で宣長が戯れ、それに石塚竜麿が応ずる様
が書き留められている。

行水のなかれそ清き鴨川やそのまさこの数見ゆるまで

(略)

植松ぬしの、まさこの数見ゆるまでとよみ給へる、鴨川

有信

のむかひを見渡してたはふれに狂歌

宣長

水清み二条新地の田舎客のはす鼻毛の数も見えけり

師の御歌にこたへ奉る狂歌

竜麻呂

敷島の歌はかりではふそく也のばす鼻毛をよむ人もかな

此外人々はふれによめる歌共あれとわすれたり、今
ひとつ思ひ出てるす

おなし時たはふれうた

宣長

そろふたり園のかへさに池洲にて山と川とを打なかつ、

〔京みやげ〕別三—105・106)

植松有信の真面目な和歌の「まさこの数見ゆるまで（真砂の数見ゆるまで）」をとらえて、宣長がざれ歌を詠み、竜麿がその尻馬に乗るといつた場面である。「此外人々はふれによめる歌共」とあるから、調子に乗ったのは竜麿だけではなかったのだらう。場の空気はすっかりくだけてしまつたはずだ。そう導いたのは、宣長自身である。

「二条新地」は享保十九年（一七三四）に開業した遊里。鴨川の東に位置する。

一〇

前項と同じ享和元年の上京時の同一の逸話が『京みやげ』と『鈴屋大人都日記』とに載っている。『鈴屋大人都日記』は「京みやげ」同様に、この上京時の行動を石塚竜麿が書き留めたもの。両者を引用しよう。

おなし時、植松ぬしいとたかくもりたるいひを残りなく
くひつくし給ひければ、かゝるをは俗に富士の山のこと
しといふなる物をいとよくこそなと人々のいひければよ
める、ころは五月のもちばかりになん狂歌 豊秋
いつしかと思ひしふしの白雪も消て跡なきけふの夕くれ

竜麻呂

富士の根の神もあやしと思ふらん五月のもちにきゆる白雪

かくよみければ大人もたはふれ給ひて

六月のもちてはなうてふしのねの五月のめしもきゆる也けり

此三ツの歌の返し

有信

もちの夜にふるてふふしの雪よりも消にし雪につもることのは
人々わらひあへり 〔京みやげ〕別三—113)

有信高うもりたるいひをのこりなくくひつくしければ、かゝる
をはよに富士の山のごとしといふなるものを、よくこそなど
人々のいへりければ、たはふれに龍麿、

ふしのねの神もあやしとおもふらむ五月のもちにきゆるし

ら雪

広治

いつしかとおもひしふしの白雪もきえてあとなきけふの夕
くれ

有信

もちの夜にふるてふふしの雪ならてきえにしいひにつもる
ことの葉 〔鈴屋大人都日記〕別三—149・150)

『京みやげ』に「おなし時」とあるのは、この少し前に「五月のもちのころ、師の君とともに千楯主の許にまかりけるに、」とあるので、享和元年五月一日のころとわかる。「千楯主」は城戸千楯。京で書肆を営む。寛政九年（一九七七）入門。享和元年当時は二四歳。錦小路室町西の自宅に宣長一行を招いた

のである。

「豊秋」「広治」と記されているのは安田広治。「豊秋」は寛政九年に宣長が付けた名。

植松有信が高く盛った飯を食べ尽くした。飯を富士山に見立てて、そこに集う人々が狂歌を詠み合ったという。竜麿歌に「あやしと思ふらん」、宣長歌に「六月のもちではなうて」とあるのは、次の万葉歌を踏まえてのこと。

富士の嶺に降り置きし雪は六月の十五日に消ぬればその夜降りけり
〔万葉集〕卷三 三三〇番注五

広治、竜麿、宣長の歌が出揃ったところで、食べた当人の有信が「雪は消えたが、言の葉が積もった」と受けるのは、即興とは思えないほどになかなか息が合っている。

口火を切ったのが、『京みやげ』では広治、『鈴屋大人都日記』では竜麿、つまりいずれの場合も著者自身のように書かれている。後者に宣長歌がないのはいかなる事情によるのであろうか。宣長歌は「もちにはあらで」ともせず、「もちではなうて」と話し言葉にくだげている。

一

次も同じ上京時の出来事。やはり『京みやげ』と『鈴屋大人都日記』にある。

四条のやとりにて 富小路三位の殿のべんしよはいつくぞととひ給へるを、源氏とき、ひがめて、師のかうせち

せらる、巻をととはせ給ふと心得て、若紫の巻になむ侍ると申ければ、こよなかりけるいらへかな、廁にもさるみやひたる名ありやなどのまひて、其むしろにおはしましける殿たち笑ひあひ給へは、おのれもえたへてほ、あみぬ、さてのちによみて奉る
竜麻呂

北山は若紫のゆかりあればちかきふねの川やとふらん
御返し

いす、川やそせをとへは我忍ふ和歌紫と聞かうれしき

〔京みやげ〕別三—116

ある人御茶御たはこぼになどまゐらせけるに、なにがしの君の、便処はいづくぞととひ給へるを、源氏とき、ひがめて、師のかうせちせらる、巻をととはせ給ふと心えて、若紫の巻になむ侍ると申ければ、こよなかりけるいらへかな、廁にもさるみやびたる名ありやなどの給ひて、其むしろにおはしける殿たちわらひあひ給へば、みな人えたへてほ、あみぬ、さてその人のよめる

北山は若紫のゆかりあればちかき貴船のかはやとふらむ

御かへし

五十鈴川やそ瀬とひしに我しのふ若紫といふそうれしき

〔鈴屋大人都日記〕別三—159

両者の表現に酷似する部分のあるのは、『鈴屋大人都日記』の編纂に安田広治が協力しているからで、異とするには当たらず

ない。『鈴屋大人都日記』でこの直前に「廿六日綾小路中納言殿、富小路三位殿、錦小路三位殿、日野中宮権大進殿のこはせたまふによりこの四条のやどりにて、延喜式の祝詞の巻なる、大赦の詞を説聞え給ふ事を……」（別三—158）とあるので、享和元年五月二十六日のことである。この上京時の歌を筆録した『玉の名つぎ』の記述（別三—93）から、「綾小路中納言殿」は綾小路俊資、「富小路三位殿」は富小路貞直、「錦小路三位殿」は錦小路頼理、「日野中宮権大進殿」は日野資愛と判明する。俊資四四歳、貞直四一歳、頼理三五歳、資愛二二歳である。

上記の二つの記述を合わせると次のようなことがあつたらしい。宣長が堂上歌人に講義した折のこと。石塚竜麿が茶や煙草盆を差し出したとき、講筵に列なつていた富小路貞直が「便所はどこか」と尋ねた。竜麿は「便所」を「源氏」と聞き誤り、宣長が講義する『源氏物語』の巻を問うたと誤解し「若紫」と答えたところ、皆のほほえみを誘つた。その誤解を竜麿は狂歌に詠み、富小路貞直が返歌をしたという次第である。「貴船の川やとふらむ」「五十鈴川やそ瀬とひしに」に「厠（かはや）」が詠み込まれている。伊勢の五十鈴川を持つてきたのは、宣長及び門人たちの出身地によそえてのことであろう。

これを記録する二書は、表現が似ているにもかかわらず、いくつか差異も見られる。『京みやげ』には「竜麻呂」「富小路三位の殿」と当事者の名が明記されているのに対し、一方の当事者である竜麿は「鈴屋大人都日記」で一切個人名を明かしていない。自らを「ある人」「その人」とはぐらかしている。また「鈴

屋大人都日記』ではその場でやりとりがなされたように読み取れるが、『京みやげ』には「さてのちによみて奉る」とある。「さてのちに」は「その直後に」とも「後日」とも解釈できるだろう。

一一一

ことは遊びの範囲をどう設定するかは難しい。ある言語行為が遊戯性を持つのか否かの判断は主観的にならざるを得ない。第二節で「耳成山」を「耳無し」に読み成す例を示したが、次の例は「音きき山」に「音に聞く」を効かせた和歌である。

としころ音き、山といふ処に庵をしめおきける、此たひよきついでなれば翁をいさなひ物して花など見せんと思ひまうけつるを、ほとなき旅居なればさることもえせて、口をしう思ふよしいひてそこなりける桜ををらせてそへたりける 高門

音き、の山のみよとの桜花手をりまつるはわかうしのため 高門

かへし

きのみまで音にも聞ぬおとき、の山の桜を見らくしよしも

高門か音き、山の別業のときき、て 春庭

名に高き音き、山を音にのみき、てかへらんことをしそ思ふ

（「藤のとも花」別三—22）

これをことば遊びと呼ぶならば、掛詞を含んだ和歌の多くも

その範疇に入れることになる。この小論ではこの類は排除した。

注

- 一 新日本古典文学大系『萬葉集一』（岩波書店 一九九九年五月）
- 二 新編日本古典文学全集『古今和歌集』（小学館 一九九四年一月）
- 三 『新修京都叢書』第一〇卷（臨川書店 一九六八年八月）
- 四 新日本古典文学大系『源氏物語三』（岩波書店 一九九五年三月）
- 五 注一文献に同じ。